

新しい技術の介護現場への導入

人の動きを知ることで持ち上げない介助が可能となる。

持ち上げない介助

キネステティクス

腰痛予防

キーワードについては
必ず3つ記入の事！！

介護老人福祉施設 月寒あさがおの郷

発表者
(研究者)

○大浦 孝之 (介護福祉士) 今野 民子 (看護師) 澄川 睦男 (理学療法士)

施設の概要

※ここに記載した内容のうち、発表内容に直接重要な関係を持たない事項については、本資料をもって発表の際の説明から省略してください。

設置主体	社会福祉法人 溪仁会	経営主体	社会福祉法人 溪仁会
開設年月日	平成23年8月8日	所在市町村	札幌市
市町村人口	1,941,525 人	65歳以上人口 (高齢化率)	394,753人 (高齢化率20.3%)
利用者定員数	80 人	利用者平均年齢	86.3 歳
職員数	74 人	職員数内訳	介護職 53名 看護職 10名
併設施設・事業	(介護予防) 短期入所生活介護・(介護予防) 通所介護		
施設のサービスの概要	介護老人福祉施設		

発表の概要

①取り組んだ課題

状況：当施設はユニット施設であり、体制上ユニット内に一人の職員しか配置できない時間帯が存在する。移乗、排泄介助などで二人での介助が必要な入所者はこれを行うことが出来なかった。
課題：入所者の尊厳を守るにあたり一人でも介助ができること、また介助者に腰痛などの負担がかからない介護技術が必要でありこれに取り組んだ。

②具体的な取り組み

始めは青山幸弘氏の介助法を知っていた者が単発的に移乗介助をリフティングトランスファー（青山氏のスーパートランス）で行っていたが、これに改良を加え排泄介助、入浴介助に応用できるようになってきた。この技術は施設全体で認められ導入を進めることとなった。
まず、リーダー研修の中で技術伝達が行われた。そののち、各々のユニットで立位能力が不十分な入所者を対象に一人で移乗・排泄介助ができるように個々の職員に技術指導が行われた。
その結果、延べ9名の入所者にこの技術が用いられるようになり、現在では当施設において、1日に1度もトイレを使用することのない入所者は存在しない。その中でも看取り対象者においてもできるだけ最後までトイレや普通に使用できる生活を可能としている。
キネステティクスは当施設の職員が始めて経験してからまだ2年弱であるが、これも介護環境の向上につながるということで施設として取り入れていくことが決定した。現在は看護師1名、理学療法士1名、介護福祉士4名がベーシックコースを終了し、そのうち3名がアドバンスコースを受講した。
当日の発表ではリフティングトランスファーとキネステティクスを具体的に紹介しながら取り組みの状況を報告する。

③活動の成果と評価

新しい技術の導入によってそれまで一人介助は無理とされていた入所者の排泄介助が可能となった。職員からは身体的負担が少なくなったとの意見が寄せられた。腰痛に対する不安も減少している。また、このことにより家族から感謝されることとなり信頼関係も大きく深めることができた。
キネステティクスの導入はまだ道半ばであるが、随時職員をセミナーに参加させるなど、成果は上がりつつある。

④今後の課題

成果と評価にあるように、キネステティクスに関してはこれからすべき課題が多く残っている。
キネステティクスは特殊な概念を理解しつつそれを現場に応用する形になるので、どうしても普及に時間がかかる。しかし、キネステティクスのセミナーを受けた職員が徐々に増加している。また、当施設から一人、法人内では計二人のキネステティクスベーシックトレーナーが今年12月に誕生する予定でありこれからの導入が加速されることが期待できる。

⑤参考資料など 特になし。